十六

クウツウゾフ

クウツウゾフが、フランスの軍隊を、何物を賭しても「一掃」し、「遮斷」し、「抑制」しやうと欲した軍隊の躁急な勢を牽制し得なかつた爲めに惹起されたかのヴィアスマに於ける會戰の後に、グラスノイに向つた其の後の退却は、(その時期の間フランス軍は絶えずロシア軍に追ひ迫られてゐた)戰爭も起らずして行はれたのであつた。フランス軍の進行は、ロシア軍が追ひ續けることが出來ないで、軈て見失つて了つたほど迅速であつた。その騎兵隊と砲兵隊との馬匹は、前進するに堪へなかつた。彼等は敵軍の行動に關して、ほんの不充分な報告しか得なかつた。ロシア兵は、四十ウエルストの連日行軍に疲れ果てゝ、少しも前方に進み

得なかつた。

この軍隊がどれほど疲勞に耐えてゐたかといふことを解するには、吾々は先づロシアの軍隊が、タルウチノを去る時に、十萬の兵を數へ、一百餘名の俘囚を別として、死傷合せて五千に上らない損亡をしたにも拘らず、それがクラスノイに到達した時には、僅かに五萬を有したに過ぎなかつたといふことを、記憶しなければならない。

一方に於て、ロシア軍の必死の追擊は、他方に於けるフランス軍の匆卒な退却と同樣に悲慘であつた。その兩者の形勢に於ける唯一の差異はかうである。ロシアの軍隊は表立つて攻擊を行はずに、任意に進軍して居たが、フランスの軍隊が、その病兵が敵軍の手中に落ちて行くことを知り乍らも、ひたすら滅亡の恐れに驅られて行軍して居たのである。而かももはや戰ひの疲勞に堪へ難かつたロシア軍は、彼等の故

郷に歸る事が出來たのである。フランスの軍隊の減少したことの主なる理由は、その遁走の急激であつた事に存する。それは追擊を主としたロシアの軍隊の損亡と比較することによつて知る事が出來る。

クウツウゾフは、タルウチノ及びヴィアスマに於て爲した如く、フランス軍の破滅的な進行と交戰することを避けやうとして、そのことがペテルブルクからの命令にも、多くの將軍の意見にも相反したにも拘はらず、其努力を拘束しなかつた。彼の唯一の希望は、敵軍の選んだ行路を行くがまゝにすると共に、味方の軍隊の進行を出來るだけ容易にしようとするにあつた。

猶又、クウツウゾフが、その軍隊に現出した疲勞の徵候と、軍隊が蒙つた損亡とを認めた時に、彼は敵軍の追擊を緩漫にすることゝ、形勢を見る爲めに待つことゝについての他の理由を見出した。ロシア軍は、ど

の道路をフランス軍がとるのか知らなかつた。またフランス軍はロシア軍が間近かに押迫つて來れば來るほど、ますゝその速力を加へた。そこでロシア軍は遠く離れて追跡することによつてのみ、敵軍の迂回するのを免れ、最も手近な道に沿うて追擊することを得た。

他の多くの將軍が提出したさまゝな計略は、日々の行進に於ける增進の意味を含んで居た。然るに追擊に關する唯一の妥當な方針は出來得る限り行軍を索制するにあつた。

この後者の目的に向つて、クウツウゾフのありとあらゆる努力が、モスクワからヴイルナにいたる迄費された。追擊は彼にとつて、偶然事や氣迷れの出來事ではなかつた。彼は寧ろ一時の慰樂などではなく不屈不撓の心を以て、その追擊を續けて行つた。

クウツウゾフが使驅した是等の戰術は、學術や理論によつたのでは

なくて、彼の心情によつたのである。この眞實なロシア人の心は、あらゆるロシアの軍人が感知して居た如く、フランス軍は征服されたのだといふこと、そして彼等を永久に打拂ふ爲めには、國境に警衛兵を備へるのが、唯一必至の事であると云ふ事を感知して居たのである。それと同時に彼は戰役の悲しむべき壓迫が、急速な行軍と、凛冽たる寒氣とによつて怖ろしいものとされてゐることを、多くの兵士と共に感じたのであつた。

然るに其他の、全然ロシア人でなかつた將軍達は、功名を馳せ、世界を驚駭し、國王若くは少くとも君公を生擒しやうと欲したのであつた。云はゞ彼等の唯一の考は、戰爭がいかに忌まはしく且不正なことであらうとも、攻擊を行ひ勝利を獲るといふにあつた。

彼等がその戰略をクウツウゾフに提出した時に、彼は、靴もなく大外

套もなくて餓死してしまつたり、一月の間も焚火を取らないでゐたりした兵士達、以前の數の半ばに減少した其の兵士達を眺め遣つた。而してその兵士達を率ゐて、既に行軍し來たつた旅程よりも、更に遠い國境までも、敵軍を追擊しなければならない――といふことをクウツウゾフは認めた。そして自分の功名を願つた將軍等に對して、簡單にその肩を搖つて答へたのであつた。

剛勇を誇示しようとしたり、戰略を使驅しようとしたり、敵軍を迫害しようとしたりする欲望は、殊にロシアの軍隊が、フランスの軍隊の小部隊と衝突した時に明かに表はれた。クラスノイに於ける場合がそれであつた。ロシアの將軍等はフランス軍の二三の部隊に出會したと信じて、ナポレオン及びその一萬六千人の軍隊に殺到した。

戰鬪を避け、而かもその軍隊を救はうとするクウツウゾフの努力を

も顧みず、ロシア軍は三日の間フランス軍の落伍者に向つて無分別な攻撃を續けた

一ドイツ人なるトール大佐は、ある一つの策を立てた。其中で彼はかう云つてゐる、"die erste colonne marschirt, (第一縱隊は前進すべし云々)と。而して常に起るが如く、あらゆる狀態が、其劃策に反對して起つた。

ユツテンベルグのオイゲネ公は丘陵の頂から、道路にある一隊のフランス軍を認めた。

そしてそれに向つて援兵を乞ふたが、來なかつた。その夜フランス軍は、ロシア軍の陣地を廻ぐり、森林を拔けて遁げ散つた。そして再びその行軍を出來るだけよく續けて行つた。

ミロラドーウイチ大將の如きは、その軍隊の糧食を準備することには何等の心配がないとか、それについて何事も氣遣ふことはないとか

揚言し、用のある時にも決して出て來なかつた。

「恐るゝところも、辱ずるところもない爵士」であると自稱した彼は、フランス語の會話に巧みでなかつたので、降服の條件を持出しては、始終フランス人と語り合つた。それが爲めに彼に任ぜられた多くの命令をも遂行しないで、徒に多くの時日を費した。

「部下よ、余は卿等にあの軍隊を献じやう」と、彼はフランス軍を指し乍ら、味方の軍隊に向つて云つた。

そこで、彼の軍隊は、疲れ果てた馬に跨り、拍車や劍の尖端で馬の歩みをわざとのろくさせて、將軍が與へたかの部隊に向つて進んだ。その部隊は、既に飢餓と寒氣とで半死の狀態にあつた哀れなフランス兵の群から成つてゐた。既にその命運をけなげにも投げ出してゐた此の一隊は、その武器を拋棄すると共に、久しく乞ひ願つてゐた終局を告げ

て降服した。

クラスノイに於て、是等の將軍は二萬二千のフランス兵を捕虜にし、無數の大砲と、彼等が「大將の杖」と名附けた司揮棒とを捕獲した。彼等は、誰が最も勳功を樹てたかといふことについての論爭に時を過した。彼等は全く自滿自足してゐたのであつた。

彼等の唯一の遺憾は、ナポレオン、若くは少くとも將軍の一人を生擒することに成功しなかつたといふことであつたので、彼等は互にそのことについて非難し合つたり、クウツウゾフに訴へたりした。

煩惱に溺らされた此等の人々は、悲しい必然の代理者に過ぎなかつた。而かも彼等は自ら英雄であると信じ、最も高貴にしてしかも價値ある事業を成就したと思つて居た。

彼等は、クウツウゾフをば、この戰役の初期以來ナポレオンを征服す

ることを妨壓した人であるとし、及び彼一個の偏愛の爲めにのみ考へる人であるとして誹謗した。更に彼等は、彼がその位置に滿足して居た爲めにボロートニアニ、ザウオーデイを撤退するのを拒んだといふことをも附加へた。最後に、彼等は彼がクラスノイに於て軍隊の行動を停止したのは、ナポレオンの前で狼狽した爲めであると云ひ張つた。更に甚だしきに至つては、ナポレオンを默認したとか、彼に買收されたとか云つて、彼を批難する事をすら敢てした。(『キルソンの覺え書』に據る)

クウツウゾフは、啻に偏頗な同時代の人々に批難されたばかりでなく、而かもナポレオンを「偉大」なりと稱揚する後代の人々及び歷史によつて、取るに足らぬ老耄れた、懦弱な狡獪な而かも放埒な官人とされた。彼は他國人によつて斯くの如く見做されてゐるが、同時にロシア人も、

彼を曖昧な種類の人物として、ロシア人の名を負うて居た爲めにのみ有用であつた操人形と見做すのである。

一八一二年から一八一三年の間に、クウツウゾフは重大な失策を爲したといふ件で、公けの批難を受けた。

アレキサンドル一世は、彼に對して不興を感じた。そして勅令によつて最近に著はされた該戰役に關する歴史に於て、クウツウゾフをナポレオンの威名に戰慄し、クラスノイ及びベレシナに於て犯した過失の爲めに、ロシア軍隊が占むべき、フランス軍に對する充分な勝利を見すゝ逸したところの欺瞞狡獪な官人として記載した。(ボグダノウイチ著『一八一二年史』中のクウツウゾフに關する記事、及びクラスノイ戰に於ける不充分な結果についての記述參照)

斯くの如きは、所謂「偉人」でない將軍輩の運命である——若くは、ロシ

ア人の心が毫も偉人を認めないとしても、斯くの如きは、實に神の意志を洞見し、自己の意志に隨從し得る、稀有な而かも殆ど常に孤獨なる人人の運命であると云はなければならぬ。

衆愚の憎惡と侮蔑とは、是等の人々が、より高き諸法を悟り得る自己の天禀の爲めに忍ばねばならぬ苛責である。

ロシアの歴史家に對して(何といふ奇異な而かも恐るべき事であらう)歴史そのものゝ惡しき道具であつたナポレオン、如何なる場所へ流し者としても尙且足りないところのかのナポレオンは、威嚴ある人格を誇示したのである——この人が、欽仰と熱狂との對象なのである。

彼は偉大なるかな。

クウツウゾフは、一八一二年戰役の當初から、その終局まで、かのボロヂノからヴイルナにいたるまで、その行ふところ、その云ふところ、曾て

一度もその戰略を過たなかつた。彼は自己犧牲と洞察の明に富んだ、極めて稀有な一典型を示した――而かも此のクウツウゾフその人は、ロシアの歴史家にとつて何物にも價しないのである。彼等は、彼について、又は一八一二年の大事變について言を爲すを恥ぢて居るのである。

然乍らあの高大なる目的――人民全體の向上心を表はしたある目的に對して、極めて忠實に且不斷にその行動を捧げて倦まなかつた歴史的人物を記憶するは、難かしいことであるに違ひない。

一八一二年に、クウツウゾフが心身を捧げ盡して斯くまでに遺憾なく實現した目的と同じやうな他の例證を歴史上に見出す事も、また等しく難かしいことであるに違ひない。

クウツウゾフは、毫も不可測な未來について語らなかつたし、彼が國

家の爲めに捧げた犧牲についても、彼が成就しやうとした、若くは既に成就した多くの大事についても、毫も語らなかつた。

毫も自己を語らず、毫も外面を裝はうと試みなかつた彼は、他の何人とも同じく常にその態度に於て自然であるやうに、最も簡單なしかも最も普通な事だけを云ふやうに心がけてゐたのである。

彼は、自分の多くの令嬢達やド、スタエル夫人に書翰を認めたり、小說を讀んだり、美しい婦人との交際を樂んだり、又は多くの將軍や士官や兵卒など〻打解けた狎々しい間柄で交つた。彼は何事かについて彼を說服しやうとする人に對しても、決して反對しなかつた。ロストプチン伯爵が、クウツウゾフに合する爲めに、全速力をもつてザウーザ橋を渡つて來て、モスクワの損亡について彼を難じて、「まだ〳〵閣下は戰はずしてモスクワを引渡してはならない」と云ふ事を云つた時に、クウ

ツウゾフは、モスクワが既に放棄されたといふことを知つてゐながら、かう答へた——

「余は戰はずしてはモスクワを放棄しないであらう」と。

アレキシエフ伯爵が、皇帝の命を奉じて、エルモロフ大將を砲兵隊の總司令官に任命すべきことを報ずる爲めに來たつた時、クウツウゾフは、その數分前に彼自らその任に當ることを布告したのであるにも拘らず、かう答へた——

「余はそれを自ら申出でやうとしてゐたのである」と。

四周のあらゆる愚かなる群集の中で、獨り事件の偉大性を默解する彼にとつては、ロストプチンの譴責や、誰が砲兵隊の長官に指命されたかといふ問題などは、何事であらうぞ。ひとり私が記載したと同じ狀態に於けるのみならず、その他のあらゆる場合に於て、この老人は實人

生の經驗によつて人々の思想と言語とは、その人々の行動に關係しないといふことを的確に知つてゐたので、彼の腦裏に映じた何事をも彼は平氣で語つた。

けれども斯の如き場合に於ける言語を賤んだこの同じ人は、全戰役を通じて彼がかくも斷乎として行動した目的に伴ふ變化については、一語をも發しなかつた。

彼がさま〴〵なる情勢の下に屢々その思慮を隱蔽した爲めに人々に了解せられなかつたといふことは、それは彼の片意地からではなくして、彼の痛ましい確信からであるといふことは明白である。

ボロヂノの戰爭後、彼とその幕僚との間に誤解が始まつた時、彼は獨り「ボロヂノは勝利であつた」と叫んだ。そして彼はそのことを報告に於けると同樣に、その死期までも、屢々口頭や手簡の上で繰返した。

彼はまた「モスクワの損亡は、ロシアの損亡ではなかつた」と揚言する唯一の人であつた。

媾和條約を申込む爲めに、ナポレオンが派遣したラウリストンに對して、媾和を結ぶことは出來ない、勿論「ロシア國民はそれを希望しない」からであると答へたのは、彼その人であつた。

フランス軍の退却の間、彼のみが「あらゆる軍事的行動は不必要であつたと云ふこと、事件はロシア軍隊の意志に從つて、そのこと自ら取行はれたのであるといふこと、敵軍の進行を便ならしむるのが、最も肝要であつたと云ふこと、ダルウチノとクラスノイと、ヴィアスマとの戰爭は、いづれも不必要であつたといふこと、彼等が若しその軍隊を率ゐて國境に達しやうと欲したなら、その軍兵を惜まなければならなかつたのだといふこと、そして最後に、十人の俘虜を獲る爲めに、一人のロシア

人の生命をすら犧牲とするを欲しないといふこと」を斷言した。

而かも欺瞞を事とする官人として記載された人、ヴイルナに於て、屈辱を敢てしてまでも、皇帝に向つて「國境を越して戰爭を繼續するのは、不必要で、しかも危險である」といふことを奏上したその人こそ、彼であつた。

然乍ら言語のみでは、彼は多くの出來事の完全な進行を把握して居たといふことを充分に證明しないかも知れない。あらゆる彼の行動や、あらゆる彼の事業や、あらゆる彼の偉業は、一の目的の爲めに傾注された。彼はその目的から一瞬時たりとも心を外らさなかつた。そしてそれを彼は三つの方法によつて獲取しやうと欲したのである。

一、フランス軍と交戰する爲めに、悉く彼の軍力を集中すること。

二、フランス軍を征服すること。

クウツウゾフ

三、フランス軍をロシアから驅逐すると同時に、ロシア軍隊及びロシア國民の側に於ける苦難を、能ふ限り少なくすること。

「忍耐と多くの時」がその方策であつた人、ボロヂノに於て攻戰し、且つ比類なき嚴肅を以て戰爭の準備をしたその人は、かの因循家なるクウツウゾフであつた。

アウステリツツに於て戰端が開かれる前に、此の戰爭は敗北である と斷言し、又ボロヂノに關しては、總ての將軍が敗北を認めたにも拘らず、未だ曾て史上に知られなかつたかの退却が、勝利に次いで來つたとはいへ、かの戰爭はロシア軍が勝利を獲たのである」と死の瞬間に至るまでも異を樹てゝ動かなかつたのは、クウツウゾフその人であつた。

最後に、吾々の知る如く、彼は退却の間に最早戰爭は不必要であると斷言し、更に新たな戰爭を始むる爲めに國境を越すべしといふ考に反

對した唯一の人であつた。

若し吾々が、最早群衆の希望と、有觸れた野心深い成上り者の腦裡に釀された策略とを混同しないならば、吾々は今や吾々の眼前に展開せる完了されたかの大事變の眞相を、明かに認め得るであらう。

この年老いた一箇の人が、獨り大勢に反抗し、鋭き眼光を以て、事變の國民的意義を先見したと共に、全戰役に亘つて、一たびも自家撞著に陷らなかつたといふことは何を意味するのか。

この洞見の力は、その根元をロシアの國民的情操に有してゐた。この情操をばクウツウゾフは彼の心の內に、衰ふることなき純潔と勇氣と共に合せ有してゐたのである。

而していふまでもなくロシア國民は、この情操をクウツウゾフのうちに認めたので、宮廷に於て失敗したこの老人を、國民的戰爭に於ける

指導者たらしめる爲めに選んだのであつた。彼等は皇帝の聖旨に反して、彼を選んだのであつた。

唯この情操のみが、クウツウゾフを人間的感情の極致に到らしめ、且つ多くの人々を弑殺し、鏖殺する爲めにではなく、むしろ人々を慈愛し救治する爲めに、指揮に當る將軍の彼をして、その全努力を傾けさせたのであつた。

この素樸な、謙讓な、しかもそれ故に眞の偉大なる人物は、多くのヨーロッパの英雄を製作する爲めに歴史によつて使役された、かの既成の虚構なる鑄型に投入れられなかつたのである。

從者にとつては、彼は偉大な人物ではなかつた。從者は偉大そのものについて彼自身と同じ考を有してゐたからである。

十七　ベレシナ

フランスの軍隊は、規則正しい數學的進行に於て散亂して了つた。

ベレシナの通過は、よしそのことに關して許多な書物が著述されてゐるとは云へ、それはフランス軍隊の全滅に於ける中間の階段の一つに過ぎなかつたと共に、この戰役の重大なる挿話ではなかつた。

ベレシナの通過については、これまでに夥しい著述があつたし、又これからも夥しくあるだらう。何となれば、フランスの軍隊がその時まで耐えに耐えて來た單一の災害が、今や一團となつて群り來つたからである。そして慘憺たる災禍の消し難い印象をば打眺めた人々の記憶に残してかの橋梁が脚下にくづれ落ちた時、それは彼等フランス兵

の上に墜ち來つたのである。

ロシア人は、ベレシナの通過に關して多くの著述をした。何故なればかのピュールが、その河上に於ける戰術的係蹄にナポレオンを誘ひ込まうといふ計略をペテルブルグ(戰場から隔たれる)に於て企てたのだからである。

總ての人は、何もかもかの計略に從つて行はれたと說得されてゐる。そしてベレシナの通過はフランス軍の敗滅であつたと主張するのである。

處で、ベレシナの通過の結果は、フランス軍にとつてはクラスノイの戰爭で蒙つたよりも僅かな災害しかなかつた。彼等は極めて僅少な砲門と俘虜とを、ロシア軍の手中に委棄したに過ぎない。統計表がこの事を證明する。

ベレシナの通過は、何と云つても敵軍の退却を遮斷する爲めの畫策の愚かしさを證明し、又簡單にフランス軍を追擊するといふクウツウゾフの考へを辯明する助けになつたに過ぎない。

フランス軍は、絕間なく增進する速力を以て、ありとあるその勢力を遁走に集中して速進した。彼等は傷いた獸のやうに遁走した。隨つて彼等をその途中で止めやうとする事は不可能であつた。

このことの實證は、通過の爲めになされた配備に於てよりも、寧ろかの橋梁に於て惹起された事態によつてなされた。

橋梁が破壞された時には、凡ての群集や、武裝してゐない兵士や、ロシア人の俘虜や、子供を連れた女達は、フランス軍の縱列を編制した情勢の引きずるまゝに落伍もせずに小歇みもなく進行し、或は小舟に投じたり、或は氷のやうな水中に陷つたりして、その慌立たしい行進を續け

て行つたのである。

この前進は無理ならぬことであつた。

逃走者の情勢と、追走者のそれとは、等しく險惡であつた。彼等は彼等の協力にたよつたり、お互に同じ情態にあるといふことを思つたりして互にその災厄の中に密接し合つた。

ロシア軍に降參したところで、彼等の狀態は好ましくはならないで、衣食に關する點で更に〳〵惡くなつたに違ひない。

フランス軍は、ロシア軍がその俘虜の處置を知らないことや、全軍の半數よりも多い俘虜が、焦躁し乍らも飢餓の爲めに死んで行くといふことを確めた精密な報告を要しなかつた。フランス軍は、他に方法を盡し得ないといふことを承知して居たのである。

フランス軍に好意を抱いてゐた最も憐み深い將軍達もロシア軍に

仕へてゐたフランス人も、ロシア軍が忍ぶ災厄を、共に享け忍ぶ多くの俘虜に對して、何事をも盡し得なかつた。ロシアの將軍達は、その飢ゑた多くの兵士から、彼等が素直に且無邪氣にして居たにも拘はらず、フランス軍の俘虜の爲めに必要な麪包や衣服を奪ふことが出來なかつた。

それにも拘らず、俘虜達を寵愛したロシアの將軍が幾らかはあつた。が、さういふ人達はむしろ例外であつた。

フランス軍の背後には、たしかな死が襲つてゐた。前方には、希望があつた。彼等は多くの橋梁を燒棄てた。彼等の唯一の安全は、遁走にあつた。そこで彼等はこの遁走にありとあらゆる精力を傾注したのである。

十八

ナポレオンとアレキサンドル一世

若し世の歴史家に與して、偉大は、たとへばロシアやフランスの偉大とかヨーロッパの國勢の均衡とか、革命思想の喧傳とか、一般的進歩とか、乃至その他さま〴〵の目的とかいふが如き、ある定まつた目的の方へ人類を指導するものであるといふことに意を同じくするとすれば、吾々は偶然事乃至天才者の干與に依らずして、歴史的事件を説明することは不可能である。

若しこの世紀の初めに於ける幾多のヨーロッパの戰爭が、ロシアの偉大をその目的としたとすれば、その目的は、戰爭を行はず、侵略をも行はないで達せられたに違ひない。

若し、これに反して、その所志とする目的がフランスの偉大であつたとすれば、革命とか、帝權とか云ふものを要しなかつたのである。

若し掲げ出された目的が革命思想の喧傳であつたとすれば、書物は兵士よりも更に好ましくその事業を成就せしめたに違ひない。

若し最後に、文明の進歩がその目的であつたとすれば、多くの人々を滅盡することや奪掠することなどよりも更に有効な幾多の手段があるといふことは充分明らかである。

何故多くの出來事は、乙をとらずして寧ろ甲の進路を取つたのであるか。歴史家はかう答へる——

「事變は形勢を生んだ、そして天才はそれに惠まれたのである」と。

然らば「事變」とは何であるか、「天才」なる言葉の意味は何であるか。

「事變」とか「天才」とかは、現實に存在する何物かを表示しない言葉であ

る。隨てそれを定義する事が不可能である。

彼等は、辛じて出來事を觀察する或る方法を表示するに過ぎないのである。

私は事實の原因に關しては無識である。私はそれを知り得ないと信じてゐる。それ故に私は又それを發見しやうと試みない。私はいふ、それは偶然事であると。

私はある力が、人々の通常の性質と相容れない働きを生じたと認めるが、その力の原因にまで探り入ることは出來ない。そこで私はそれを天才だと叫ぶのである。

毎夜羊飼によつて、特殊の圍内に閉ぢ込められ、そして他の羊に二倍も肥滿するやうになる迄、特別な食物を與へられた羊は、爾餘の群に對して天才となつて現はれざるを得ない。この羊は、普通の圍ひ内に入

らないで、自ら一つの場所を占め、特別の糧秣を食する、そして一たび肥滿したとなると、屠殺者に引渡され、殺されてしまふ。而してこの事柄は連續して起る異常な事變の數々ともつれ合つた天才の結果として疑もなく他の羊達を感動させるのである。

然乍ら若しこの羊達が、すべての成功は、專ら彼等自身の幸福に關はつてゐるのだといふことを考へ至つたならば、更に若し彼等が出來事といふものは、彼等の考へ及ばない目的に從ふものであると云ふ事を承認するならば、彼等はかの肥滿した羊の運命に於ける行爲の統一や論理的歸結やを感知するであらう。

縱令彼等が何故かの羊が肥滿したかを知らないとしても、その羊にとつて何事も偶然に惹起されたのではないといふことは了解するであらう。そして彼等は、事變乃至天才の何れにも、說明の助けを强ひら

れずとも濟むであらう。

吾々が事物の究極の目的を知らうとする努力を拋棄し、その目的は全く吾々の理解を超脱してゐるものであるといふことを實感する時にのみ、歴史的人物の生涯に於ける必然性に順從な、さま〴〵な事實の論理的連續を發見するのである。而してその時初めて彼等の行爲と、普通の人々の能力との間に不權衡の理由が辛うじて吾々に啓示されるであらう。そして吾々は事變とか天才とかいふ言葉に賴らなくとも濟むやうになるであらう。

斯くして、若し吾々はヨーロッパ人の行動の目的の不明であるといふこと、自分等の知るところはフランスに於て、次いではプルシヤに於て、アストリヤに於て、更にロシアに於て行はれたかの虐殺の如き確實なる諸事實に過ぎないといふこと、而して是等の出來事の原因は、東方

に向ふ西方人の、又反對に西方に向ふ東方人の運動に存しなければならないといふこと、――を承認するとすれば、吾々には最早ナポレオン及びアレキサンドル一世の性格に、天才若くは或る異常なものを見出すことの必要がないのである。吾々は是等の人物に他の人々と同しい人間を認めるであらうし、是等の人物をして名聲を馳せしめた些細な出來事をば、偶然事によつて說明することの必要もなくなるであらう。而かもなほ是等の些細な出來事の必要であることが、吾々には明白になるであらう。

吾々が究極の目的に關する穿鑿を拋棄した時に、吾々は恰もある草木に、それが生ずるよりも異つた花や、異つた果實を求めやうとすることの不可能であると等しく、二人の歴史的人物、卽ちアレキサンドル一世、及びナポレオンが、その生涯の最初より最後まで、彼等に賦與された

使命を、確實にしかも丹念に履行し得たのであると想像することも不可能であるといふことを理解するのである。

今世紀の當初に發したヨーロッパの事變に於ける根本的事實は、最初西方より東方に、そして後に東方より西方に向ふ、群集をなした人民の戰爭的行動であつたのである。

この行動は、西部に於て始まつた。そこで西方の人民が、遙かモスクワまでもその戰爭的な前進を押通すべき軍勢を有する爲めには、かくの如き事が必要であつた。

一、東方から來たる好戰的集團の衝擊に堪ふべき、充分な廣がりの戰爭的集團をして集合すること。

二、悉くその因襲と、慣習とを拋棄すること。

三、この戰爭的行動を成就する爲めに、その目的を果たす爲めに、虛言

に、掠奪に、虐殺に訴へることについて、彼等を是認すると共に、自らをも是認し得る一人の人間を、首魁に仰ぐこと。

かのフランス革命から始まつた小さな幼い種實は、まだ十分大きくならないうちに播き散らされた。因襲と慣習とは變ぜられた。新しいしかも更に注意すべき群團が、漸次に形成された。そしてそれに伴つて新しき因襲と新しき慣習とが生じて來た。

この四圍の情態の中に運動の首魁たる地位を占むると共に、來るべき出來事のあらゆる負擔を負ふべき人物が、その使命に向つて準備されたのである。

この人は、主義もなく、慣習もなく、因襲もなく、名もなく、フランス人でさへもないが――一寸見たところではそれは奇異なしかも偶然な四圍の情態の結合である――かのフランスを分割するあらゆる黨派を

すべり脱けた。そして何人とも結黨しないで、あらゆる黨派の首魁に据ゑられたのである。

四周の人々の愚昧と、競爭者の懦弱と無力と、彼自らの僞つた誠實と、彼の光輝ある而かも僭横な利己主義とが結び合つて、この人をば陸軍の首將に推擧した。

イタリーに於ける彼の軍隊の優越な力倆と、敵軍の戰鬪を好まざることゝ、彼の自己を處する大膽さと、子供らしい厚がましさとが、彼に軍事的盛名を賦與した。

人の所謂幸福な偶發事が、到る處で彼に出遇つた。

フランスの當路者は、彼を嫉視した。而かも彼等の嫌忌が彼にとつて有利であつた。

彼の新しい境地を開かうとした企畫は、交々失敗した。ロシアは彼

の命令を拒み、回教君主は彼の提言を棄却した。

イタリーに於ける戰爭の間、彼は屢々敗滅の危機に瀕したが、常にある偶然の形勢によつてそれを免れた。

ロシアの軍隊――彼の盛名を滅し得た無雙の軍隊は、さま〴〵な外交的聯合の爲めに、彼がヨーロッパにある間は、その地を踏まなかつた。

イタリーから歸還した時に、彼はフランスの政府が必然瓦解に終らねばならない分離狀態にあることを認めた。そこでナポレオンは、この險惡なる形勢を免かれる爲めに、アフリカ遠征の馬鹿げた而かも偶然な計畫を策出した。

再び好機が、不思議にも彼を助けた。難攻不落と傳へられてゐたマルタは、砲火を見ずに陷落した。ナポレオンの最も大膽な計畫は、成功に終つた。

敵の艦隊は、取るに足らない船舶の通過を許さなかつたが、而かも彼の軍隊の渡航を迫害しなかつた。

アフリカに於て、彼は殆んど武裝しない住民に對して絶えざる暴虐を行つた。而して彼と共に是等の兇暴に加はつた人々は、就中彼等の首魁なる彼は、彼等の行ふことは偉大であり、高尚であるといふこと、榮譽を贏ち得たといふこと、而してその勳功は、シーザー及びマケドンのアレキサンドルのそれに比すべきであるといふことを自認した。

この「榮譽」とか「偉大」とかいふ理想は、それに從ふ人々をして如何なる罪惡の前にも畏縮せずに彼等の行爲の凡てを不可思議なる後光を以て圍繞するやうにならせた。かのナポレオンと、彼の幸運に與かるすべての人々との手引ともいふべき此の理想は、アフリカに於て驚くべき度合に達したのである。

彼が企つるあらゆる事は功を奏した。疫病も彼を襲はなかつた。俘虜の虐殺も、罪惡として彼に負はされなかつた。

彼の躁急な、子供らしい、不規則な、不名譽な撤退——即ち慘狀に陷入つて居る多くの彼と武運を共にした味方を委棄したその撤退も、天晴な行爲として思料された。次いでは又イギリスの艦隊までが、彼を免かれしめた。

かくして彼が自ら犯した夥多な罪惡と、人々が彼に齎らした滿足とに眩惑されて、彼は所志とする明確な目的もなくパリーに到着した。共和政府は、一年前には尙彼を貶黜する權力を保持してゐたが、その時は何れの黨派にも從屬しない彼ナポレオンの出現が、直ちにその至上權を獲得し得る程、崩壞に瀕してゐた。

彼は何等の畫策を持たなかつた。彼はすべての人を恐れてゐた。

然るに多くの黨派はこの安固を彼に認め、彼の援助を仰いだ。

何故なれば、イタリー及びエヂプトに於て確立したかの榮譽と偉大との理想を以て、彼の野生的な自己崇拜と、彼の罪惡に於ける大膽さと、彼の僞れる誠實とを以てして當に開展せらるべき事變の衝に當り得る人は、實に彼であり、彼のみであつたからである。

彼こそ、期待された地位を占むる爲めに要された人である。かくして彼自身の意志に關係なく、何等の確定した畫策もなく、而かも躊躇と夥しい過誤とがあつたにも拘らず、彼は權力の占有を目的とする徒黨に引込まれた。而かもこの徒黨は成功を告げたのである。

彼は五執政內閣の一座席に推擧された。

驚駭した彼は、自ら我を失つたと信じて、遁れやうと欲したり、病を佯つたり、身の破滅を來たすかも知れないやうな、愚かしい數語を發した

りした。

けれども、嘗ては倨傲で且決然たる意志を有してゐた人々、そしてその當時フランス政府を組織してゐた人々は、彼等の競技が終つたといふことを知つた。

彼等はナポレオンよりも更に攪亂されて居た。そして曩には彼等の權力を確保して、僭取者を顚覆しやうと告げた彼等は、今はそれと正反對な事を告げたのである。

偶然事は、寧ろ無數の偶然事は、彼に權力を賦與した。而してあらゆる人々は、恰も合意によるが如くに、彼の權力を鞏固にしやうと焦つた。

偶然事をこゝに至らしめたのには、かの執政內閣の議員達を、ナポレオンの面前に叩頭せしめた懦弱な性格が與かつてゐるのである。

偶然事は、パウル一世の性格を成さしめた、そして其の君主をしてナ

ポレオンの權力を承認せしめた。

偶然事は、ナポレオンに對して一の謀計を企てたが、而かも破滅を齎らす代りに、むしろ彼の權力を鞏固にした。

偶然事の爲めに、かのユージェン王は、彼の掌中に落ちて、刺殺された。この事實は彼が統御すべき權力を占有した以來、何事にも優つて彼の權利を公衆に示した。

偶然事によつて、彼はイギリスに向つて遠征する爲めに、全力を擧げた。この彼を破滅に陷入れたかも知れない企畫は、毫も果たされなかつたが、然し彼はマツク及びアウストリアの軍隊を襲つて、一戰もせずに征服した。

偶然事と天才とは、アウステリツツに於て彼に勝利を獲得させた。而して常に偶然事によつて、全ヨーロパのあらゆる國民のあらゆる人

々(進行の途にある出來事に關係なきイギリスを除く)は、ナポレオンの罪惡に對して恐怖を抱いて居たにも拘はらず、彼の權力と彼の專斷な稱號とを承認し、且つ彼の榮譽と偉大の理想を、正當なしかも高尚なものと見做したのである。

西歐の軍力は一八〇五年、一八〇六年、一八〇七年及び一八〇九年に於て、幾度か東方に誘導された後に、恰も未來の行動に備へるが如くに、增大され、强固にされた。

一八一二年までに、フランスに於て組織された人々の群團が、中央ヨーロツパの人民を糾合し、夥しき集團を形成した。

この集團が增大するにつれ、その首魁たる人もまたそれに比例してその位置を强大にした。

この大運動の爲めの準備の十年間、彼はヨーロツパのすべての君主

を統治した。王冠なき君主等は、ナポレオンによつて發明された偉大と榮譽との愚かしい表象に對抗すべき何等の妥當な表象をもたなかつた。

彼等は相次いで彼に歸服し、彼等自らの無意味を證示した。

プルシヤ國王は、この偉人の許に調停を乞ふ爲めに、その皇后を遣はした。アウストリアの皇帝は、若しこの偉人が、皇帝の姫をその閨室に迎へられるならば恩寵を受けるであらうと考へた。庶民の神聖の守護者なるかの法皇は、宗教をこの偉人の膝下に委ねた。

ナポレオンの役割は、その四圍の情態によつて强請され、現在及び未來に對する負擔を負はせられ、來るべき形勢に對して準備された。

彼が試みるありとあらゆる行爲や、罪惡や、運試しの策も、いかにも雄雄しい事のやうに世界に歡迎された。

ドイツ人が、彼に祝賀の意を表さうとした時、彼等はイエナとアウエルスタートの名譽の爲めの祝賀以上の何ものについても考へ得なかつた。

偉大そのものは、彼に限られたのではなかつた。彼の祖先、兄弟、女婿、義兄弟もまた偉大であつた。

ありとあらゆるものが、彼の理性の一閃をも剩さずに奪ひ去らうとし、恐るべき行動の爲めに彼を準備せしめやうとして協力した。

彼が用意を整へた時には、すべての軍勢もまた用意が整へられた。

侵略は東方に向つて猛進した。そしてモスクワに於て終結した。

首都は占領された。ロシアの軍隊は、アウステリツツからワグラムにいたる間に、敵軍の蒙つたよりも更に全き破碎を蒙つた。

而して今や、俄かに、豫定の目的に向つての止む時なき成功を、彼に贏

ち得させて來た多くの艱難事の代りに、吾々はボロヂノに於ての頭痛とか、モスクワに於ける大火とか、又はロシアの霜雪とかいふが如き、無數の背馳した事變の續出を見出すのである。而かも吾々は天才の代りに、今迄歴史に知られなかつた無力と卑賤とを看破するのである。侵略は後戻りの進行と變つた。而かも偶然事は、その進行を有利ならしめずに、不利益ならしめた。

軈て吾々は、先の運動に酷似した、東方より西方への反對運動を看取した。

その運動は、また一八〇五年、一八〇七年及び一八〇九年に於ける豫戒的活動によつて先觸されてゐた。

以前の場合と同じく、新しい團體が組織され、增大され、そして一大集團となつた。中央ヨーロッパの人民は、この行動に參加した。この行

動は、明かに前の行動の反覆である。何となれば、何一つこの類似を完了するに不足しなかつたし、又その結局が近づくにつれても、半途に逡巡したり、速度を增進したりするやうな事もなかつたからである。

この運動の決勝地點であるパリーは、遂に襲はれた。そしてナポレオンの政府と、その軍隊とは崩壞した。

ナポレオンその人は、最早何ものをも代表しなかつた。彼の運動は、憐憫と嫌惡とを惹起した。新しき而かも不可解な事變が併發した。同盟國はナポレオンを嫌忌し、あらゆる彼等の不幸の原因として彼を目した。

この時には、その威名と權力とを剝奪され且つ罪惡と不信との爲めに誹謗された彼は、法律以外の而かもこの點に於て何人も彼に豫期しなかつた不思議な事變によつて、十年前にも十年後にも、同じく惡漢で

あつたと見做されなければならなかつた。

彼の役割は、未だその終極まで演ぜられなかつた。法律以外の一悪漢であつたと布告された彼は、フランスから二日にして達する一孤島に送られた。そして彼は、衛兵と無量の財寶と共に、その島を領地として與へられたのである。神は萬事をしろしめす。

多くの人民の激昂は、靜まりかけた。さまざまな波動は退いて行つた。そして波の起伏せる海上には、靜穩を齎らしたと想像される數人の外交家が漂うてゐた。

然るに海は再び奔騰した。外交家は、彼等の軋轢が暴風雨を招いたと想像した。彼等はその君主等の間に、別の戰爭を豫想した。形勢は

彼等の統御を俟たなかつた。

然し乍ら、彼等の足許まで迫つたこの波動は、彼等が望見してゐた方向から押寄せて來たのではなかつた。

それは出發の根源地、即ち西方の最後の波濤を起したかのパリーからの、古い波動の打返しであつた。で、すべての外交家は、その波濤が、あらゆる外交上の難局を解決し、この時代の戰爭的行動を根絶するであらうと考へた。

フランスを荒廢せしめた彼は、兵士をも伴はず、劃策もなく、單獨で歸つて來た。彼は全く衛兵の權内にあつたにも拘らず、奇妙なことには、誰も彼に手を觸るゝものがなかつた。之に反して、あらゆる人々が、彼の許に欽仰を以て馳せ集つた。而して昨日は彼等が呪詛し、而かも又一箇月以後には、再びその呪詛を繰返すべくあつた彼をば、歡呼して迎

えたのであつた。この人は、尙最後の幕に於ける彼の役割を演ずる爲めに要されたのである。

幕は閉ぢられた。演劇は終つた。俳優はその衣裳を脱いで、立去るやうに命ぜられた。彼はもはや要せられなかつた。

數年間、彼はセント、ヘレナに於ける幽居で、ひとり哀れな喜劇を演じた。彼は、最早辯明が必要でない時に、虛言と奸策とによつて彼の行爲を辯明しやうと欲した。

彼は、運命の不可見な手が推し出された時、人々が兵力に憑えたといふことは、それが何といふ憫むべき意向であつたかといふことをば、明白に世に向つて示した。

出來事の眞の施行者は、その演劇を終末に近づかしめて置いて、主要な役者から假面を奪ひ取り、彼の顏を露出させて、かういふ——

「諸卿が御信用遊ばした人間を御覽じませ、こゝに當人が罷り出て居ります。諸卿は、只今諸卿をお誘ひいたしましたのは、彼の男ではなくして、拙者でありましたことを御覽じませ。」と。

然乍ら、彼等の先入觀念によつて盲ひた人々は、永く眞理を知らずに止まつた。

吾々は、東方から西方に向ふかの反對行動の首領であつたアレキサンドル一世の生涯に於て、更に〳〵明白なしかも避け難い運命を認めるのである。

若し人が、他を押除けてこの運動の首領に据ゑられでもしたなら、彼は如何なる資質を有すべきであるか。

彼は正義の情操を有さなければならないと共に、かのヨーロッパの事變に於て、あらゆる有害なる方略から脫した利益、卽ち眞の利益を獲なければならない。

彼は、その時代の他の君主のそれよりも、更に高く深い道德的性格を有さなければならない。彼は善良で、しかも同情に富んでゐなければならない。更に彼はナポレオンの側に於ける暴虐なる攻擊の犧牲であらねばならない。あらゆる是等の顯著な特性は、アレキサンドル一世その人に見出されると共に、彼の過去の生涯に於ける無數の偶然事、卽ち謂ふところの偶然事によつてつくられたのである。

あらゆるものが――彼の敎育や、彼の自由主義的改革や、彼を圍繞せる顧問官などが、この目的に貢獻した。吾々はアウステリツツ、チルシツト、及びエルフルトを包含する必要はない。

愛國的戰爭の期間に亘つて、この人物は活動しなかつた。それは彼が要せられなかつたからである。

然るに、ヨーロッパ戰爭の趨勢が明かになるや否や、この人物は、危急の時機に際して彼に指定された位置に見出された。彼はヨーロッパの人民を併合し、終局に導いた。

終局は告げられた。一八一五年の最後の戰爭後、アレキサンドルは永く世人の口に傳はる、偉大な權力を、意のまゝに保有した。彼はこの權力を何に用ひたか。

ヨーロッパの和解者であり、青年時代から、人民を幸福ならしめやうといふ誠實なる欲求に意を注いだ人であり、國家に自由主義的改革を允許した最初の人であつたアレキサンドル一世は、いふまでもなく彼の自由なる權力によつて、眞に人民の幸福を確立したと、傳へられてゐ

るのである。吾々は何を見るのか。かの謫居に於けるナポレオンが、萬一かりに權力だに有するならば、人類の善の爲めに、どれ程多大な活動をするであらうかといふことを示す爲めに、虛僞な、しかも他愛のない策略に沒してゐた間に、その權力を占有したアレキサンドル一世は、彼の使命を果たし、而かも神の御手の彼の上にあることを知つて、卽ち一見して權力の更に價値なきことを實認し、身を退いて卑賤な人々の中に投じたのである。彼自らの云ひ得たところは僅かに次の如くであつた。

「われらにあらず、主よ、われらにあらず、唯汝の名に光榮あらしめよ、余は他の人々と等しく一箇の人なり。余をして一箇の人の如くに生活せしめよ。そは余をして余の靈魂を思ひ、神を思ひ得しめんが爲めなり。」と。

太陽の如く、若くは人間にとつて不可解なるかの『凡て』に於てこそ、單なる極微分子に過ぎないのであるが、しかもそのもの自らに於ては完全な一箇の體を構成するエーテル極微分子の如く、何れの個人もまたその人自身の內に存在の目的を有すると同時に、人間の理性にとつて不可解なるかの共同目的にあづかつて居るのである。

蜂が花から花に飛び廻りながら、子供を刺すと、その子供は蜂を恐れる餘りに、この世に生存する彼等の目的は、人間を刺すにあるのだと叫ぶ。

詩人は、花の蕚から蜜を啜る蜂を嘆美する。

そして、蜂の目的は花の香氣を嗅ぐにあるのだと明言する。

ナポレオンとアレキサンドル一世

養蜂家は、蜂はその蜂王と蜂子とを養ふ爲めに、多くの草木の花粉と液汁とを集めるのだと見做し、蜂の目的はその種族の永續を計るにあると斷ずる。

植物學者は、蜂がある花から、他の花の雌蕊に授胎を行ふ花粉を運ぶのを觀察して、蜂の目的は授胎作用にあると確言する。

他の植物學者は、草木の移植は、蜂によつて益されるものであるといふことを見て、この昆蟲の目的は、その天職に於て發見せられるものであると斷言する。

然乍ら蜂の眞の目的は、第一にも、第二にも、第三にも、乃至は人間の智慧が發見し得る如何なる目的にも、包含されてゐないのである。

人が企て得る限りの事は、蜂の生活と他の自然現象との間に存する交互作用を觀察するにあるのである。

人は、さま〴〵の出來事若くはさま〴〵の歷史的人物の究極の目的の探究に於ても、同じ制限によつて圍繞されてゐるのである。究極の目的は全然人間の達する限界外にあるのである。

——ナポレオン露國遠征論完——

大正四年十一月六日印刷
大正四年十一月十日發行
（定價七拾錢）

ナポレオン露國遠征論

飜譯者　相馬御風
發行者　東京市牛込區矢來町三番地中の丸五十八號　佐藤義亮
發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話（番町）二二二三番
振替（東京）一七四二番

印刷者　東京市神田區宮本町五番地　高橋治一
印刷所　東京市神田區宮本町五番地　新潮社印刷部

□名著四種□

色鳥

夏目漱石氏作
漱石選集

『我輩は猫である』以前の『倫敦消息』に溯つて最近の『心』『硝子戸の中』等に及ぶ。作者の著作中より最も代表的なるものを選べる傑作集也。青楓氏装畫。

特製布張箱入
價一圓二十錢
郵送料十二錢

あらくれ

徳田秋聲氏作

得意の女性描寫、得意の性慾描寫が其の極致に達せる稀有の傑作也。中村星湖氏は尊い著作なりと云ひ、相馬御風氏は讃美の念を禁じ得ずと激稱せり。

總洋布最上製
定價七十八錢
郵送料八錢

鴨川情話

長田幹彦氏作

百頁を超ゆる長篇木屋町夜話及び待宵、竹生島等の新作を始め、祇園情緒の豐かなる傑作を收めて新たに此の集を刊す。装畫は夢二氏苦心の彩筆に成る。

極彩色表紙
定價七十五錢
郵送料八錢

父の婚禮

上司小劍氏作

天滿宮、父の婚禮、東光院、兵隊の宿、鱧の皮等、傑作中の傑作を收むること十篇。作者が文壇に其名を恣にするに至りしもの、實に此等の作によつて也。

特製箱入美本
定價八十五錢
郵送料八錢

海外名著の邦譯

懺悔錄

生田長江 大杉榮兩氏共譯
ルソー著

近代主義の第一人者ルソーが赤裸々の自傳、性の惱みに悶ゆる年少時代より數奇を極めたる其の晩年に至る生涯を何等掩ふ所なく叙せる世界的大名著也。

全二冊一千頁
一冊九拾錢宛
郵税一冊八錢

お菊さん

野上臼川氏譯
ピエール・ロティ著

著者は今尚ほ現存せる佛國の文豪。明治十八年海軍の一士官として我國に來り、長崎の郊外に若きムスメお菊さんと同棲せる當時を描ける、興味深き物語也。

譯者裝幀美本
定價金九拾錢
郵送料金八錢

地獄

江馬修氏譯
ストリンドベルヒ著

著者は瑞典の文豪。煩悶の極遂に狂せるが、狂中に在りて自らその狀態を描き感想を叙せる稀有の作品。深刻凄愴を極めて卒讀に堪へざらしむるものあり。

總洋布最上製
定價七拾五錢
郵送料金八錢

戀より戀へ

相馬御風 野尻抱影兩氏譯
ミュッセ著

本書は若きエルテルにも比ふ可き薄命の戀愛詩人が、悲しき戀はかなき戀の數々を描ける、僞らざる告白にして、小説以上に感味深き物語として喧傳せらる

洋布特製美本
定價金七拾錢
郵送料金八錢

□日蓮主義研究叢書□

田中智學先生指導

日蓮主義の抱負と内容とは將來の世界を救ふ可き大宗教たると共に、大哲學大道德大藝術大事業を産み出す可き根本力たるに餘りあるもの也。志あらん人は、速に本叢書に就かざる可からず。各編皆赤熱の大文字。

第一 日蓮聖人と耶蘇　山川智應著

第二 國聖としての日蓮聖人　志村智鑑著

第三 種々御振舞御書略註　山川智應述

第四 龍口法難論　田中智學著

第五 聖訓の研究　志村智鑑著

第六 日蓮聖人と親鸞　山川智應著

特製美本　紙數一册二百頁　定價一册四拾錢　郵送料一册六錢

田中智學先生序　姉崎文學博士序　山川智應氏譯註

■和譯法華經

附錄　法華經大意□脚註索引　本文索引□法華經百首

第七版出來□紙數一千頁□袖珍型總洋布製天金□定價一圓三十錢□送料八錢

□現代評論選集□

第一編 ■王堂論集　田中王堂著

「書齋より街頭へ」以下浩瀚幾冊の氏の論著の中より、その最も代表的なるもの、氏の思想の眞髓を盡くせるものゝみを選集す。何れも不朽の名評論たり。

第二編 ■片上伸論集　片上伸著

新思想の鼓吹者として、新文藝の指導者として、新生命の探求者として、最も眞摯に最も根强き努力を致し來れる片上氏が、其眞面容を示すもの即ち此一卷也。

第三編 ■御風論集　相馬御風著

新思想新文藝の急先鋒として、現下最も華々しき活動をなしつゝある氏が、其の所産の精英を蒐めたる此の篇は實に新生命の啓示たり新生活の福音たる也。

第四編 ■阿部次郎論集　阿部次郎著

思索飽く迄深邃、態度飽く迄慎重。新しき論壇の人々の中、眞に哲學者の風格を有する阿部次郎氏の論集出づ。思想壇の新星は、此一卷に其光輝を盡くせり。

第五編 ■臨川論集　中澤臨川著

新思想の解說者新文明の指導者として重を置かるゝ臨川氏が其新舊の評論の都べてに就て精髓を拔けるもの。新しき論壇に最高の水準を示すものは此一卷也。

■特製美本■定價一册三十五錢、郵稅六錢□表紙に著者自筆の題言を刷す

■縮刷傑作文庫■

國木田獨歩作
(1) 運命
總洋布 定價四拾五錢
極美本 郵送料 六錢

田山花袋作
(2) 緣
總洋布美本 定價五拾五錢
郵送料 八錢

田山花袋作
(3) 妻
總洋布美本 定價五拾五錢
郵送料 八錢

目次

□運命論者□巡査□酒中日記□馬上の友□惡魔□壹の悲しみ□空知川の岸邊□非凡なる凡人□日の出

獨歩集中の佳篇、此『運命』一卷に在り。大膽にして鋭敏なる觀察者として、深刻なる運命論者として將た幻滅の人デカダンの人として近代精神の種々相を一身に具有せし彼の全人格全藝術は『運命』一卷に燦然たる結晶をなす。

『緣』『妻』は、『生』と共に花袋氏一代の雄篇三部作をなすものにして、實に明治文壇稀有の名著也。『緣』は『蒲團』の後日譚として『蒲團』を讀める人には別樣の感興あらんも、作者にとりては實に其の藝術の至境を示すものたり。『妻』は一文學者の壯年時代を描き、主として兩性關係の祕義をあばく。一面より見れば作者花袋氏の興味深き自叙傳とも云ふ可きものたり。

▼縮刷は原本の三分の一の廉價也。

□□代表的

名作選集

——明治大正に亘れる新文藝の精華にして、何れも不朽の實玉也。

▼特製極美本 ▼一冊參拾錢 ▼送料四錢

第一■牛肉と馬鈴薯 國木田獨歩
(附錄)欲かざるの記

第二■坊っちやん 夏目漱石

第三■蒲團 田山花袋

第四■透谷選集 北村透谷

第五■春 (上) 島崎藤村

第六■春 (下) 島崎藤村

第七■わが袖の記 高山樗牛
たけくらべ 樋口一葉

第八■爛れ 徳田秋聲

第九■平凡 二葉亭四迷

第十■高野聖 泉鏡花

十一■何處へ 正宗白鳥

十二■今戸心中 廣津柳浪

十三■耽溺 岩野泡鳴

十四■明治詩歌選 詩壇六家

十五■戀ざめ 小栗風葉

十六■別れた妻 近松秋江

十七■はつ姿 小杉天外

■情話新集■

竹久夢二氏裝畫□定價參拾五錢□郵稅四錢

第一編□舞鶴心中　近松秋江作

男は京都の有名な旅館の息子、女は其家の美くしい召使、此二人が、戀のもつれから相抱いて舞鶴の海に投じたといふ事實を描いた傑作である。

第二編□舞妓姿　長田幹彦作

新作『しぐれ茶屋』以下何れも京の舞子の戀を描けるもの、作者が色彩の豐かな音樂的な筆は、鴨河情話を描くに於て當代まことに其比を見ない。

第三編□小さん金五郎　田村俊子作

作者が心一ぱいの同情を注いで描いた小さんと金五郎の哀婉な物語。戀を全うするには死ぬより外なかつた女は何といふ悲しい運命であらう。

第四編□小夜ちどり　長田幹彦作

歌麿の繪からぬけ出た様な美くしい京の歌妓が半生多恨の情史。何人か鴨川の夜寒に泣く千鳥の精とも云ふ可き女主人公の爲に涙なきを得よう

第五編□戀ごゝろ　田山花袋作

美しい藝者が其纖手にあやつる戀の魔術を見よ。濃艶を極めたる情話なると共に、嚴肅なる藝術品。此の作者ならではと思はしむる傑作である。

泰西名著の完全譯

■新潮文庫■

洋布特製美本一冊二百餘頁　▼一部貳拾五錢　郵稅四錢

トルストイ人と生論　相馬御風譯
シエークスピヤロメオとヂュリエット　久米正雄譯
ゲエテエルテルの悲み　秦豐吉譯
メエテルリンク貧者の寶　吉江孤雁譯
イブセンイブセン書簡集　中村吉藏譯
シニツツレアナトール情話集　秦豐吉譯
ツルゲネフはつ戀　生田春月譯
ピエルロチフヨールドの娘　野尻抱影譯
ゴーチエクレオパトラの一夜　久米正雄譯
ヘツベルユウディット　中島清譯
ドオデエ普佛戰話　後藤末雄譯
シエークスピヤハムレット　久米正雄譯
ピエルロチ日本印象記　高瀨俊郎譯
▼以上は皆一冊讀切なり▲
ブリユウ獨身婦人　中村星湖譯
マルコポーロ旅行記（上下）　生方敏郎譯
バルザツク公爵夫人の秘密　高安月郊譯
アナトールフランス女優タイス（上下）　生方敏郎譯
トルストイ光の中に歩め　阿部次郎譯
ダスタエフスキイ白痴（第五編近發行）　米川正夫譯
イブセン人形の家　中村吉藏譯
ダスタエフスキイ罪と罰（全七冊完了）　中村白葉譯
トルストイ性慾論　相馬御風譯
ダアウキン種の起原（全五冊完了す）　大杉榮譯

▼現下の出版界、惟一の全譯叢書として聲價益々高し

■日本を中心とする極東大戰錄！
■日本の將來を憂ふる人は讀め！

□軍事小說□

■日本の危機■

露獨の來襲

伊崎陸軍少將序
原田步兵中尉著（初版賣切 再版出來）

總洋布最上製箱入極美本
詳密戰鬪地圖▼價壹圓參拾五錢
其他數葉挿入▼小包料金拾貳錢

歐洲戰後、露西亞と獨逸とは其の怨恨を棄てゝ握手すべく、而して相結んで我國に襲擊し來るの日の遠からざる可きは、既に識者の疑を挾まざる所也。原田中尉は戰爭哲理の論家として知らるゝの士、國民の警醒を促さんが爲め、其得意の小說的描寫を用ゐ本書を著はされたり。內容は日本對露獨の交涉破裂して遂に開戰するや、今日我國と最も親善なる某國亦彼等に助力せる爲め、我は遂に重圍に陷り、海に陸に惡鬪苦戰の限りを盡せる悽絕慘絕の光景を描く。軍事的事實を基礎として詳密の叙述をなせるものなれば、何人も一讀して、恐る可き運命の我が足下に迫れるを痛感せん。

■凄絕慘絕なる軍事小說!!

トルストイ著作

——新潮社出版——

■トルストイ著作■

全人類の悩みを代表せる心靈の大苦悶錄

——何人も一度は必ず讀んで深く考ふべきの書也

我が懺悔

相馬御風氏譯

□洋布製美本
□定價六拾錢
□送料八錢

═譯者曰く、私はこれ程の怖ろしく又懷かしく喜ばしい書物をこれまでに讀んだ事が無い！═

トルストイ齡こゝに五十、念々轉た人間の眞理を索めて止まず、遂に藝術の榮光に輝ける其の前生涯を否定して、宗教的精神の途に上らんとし、敬虔の涙を以て昨の非を懺悔す。是れ實に全人類の惱みを代表せる偉大なる心靈の苦悶史にして、トルストイの著作頗る多しと雖も、最も赤裸々に其の眞面目を露呈せるもの、此書に若くは無し。彼が他の著作に現はれたる凡百の思想と感情とは、悉く此の一卷に凝結す。相馬御風氏、トルストイに傾倒すること玆に年有り。今感激の餘を以て新譯を全うし、附するに「廻轉期のトルストイ」なる一大論文を以てす。必讀の書なること、何ぞまた言ふを須ゐんや。

■トルストイ著作■

露文より移植せる唯一の完全譯

全譯 戰爭と平和（一）

昇曙夢
米川正夫譯

□總洋布上製
□紙數四百頁
□定價七拾錢
□送料八錢

本書は、トルストイが畢生の心血を傾けたるもの、其の量に於いて質に於いて世界近代文學中第一の雄篇也。ナポレオン侵略時代の露西亞の社會相を經とし、トルストイ自身の閲せる深刻にして痛切なる苦悶を緯とし、構想の雄大、描寫の靈活、兩つながら無双、人物の主要なるもの二十餘人、皆鮮かにその箇性を活躍せしめたるが中に、作者の化身と見る可き主人公ピエル及びナポレオンに於て精神界の偉人と物質界の偉人との逢遭を描けるが如き、實に古今の文學中稀に見るの壯觀たり。今露文學界の權威たる昇氏と、新進露文學家として知られ、現に陸軍露語教授の職に在る米川氏との努力により、玆に四千枚の大作、一字を略せざる全譯を公にす。而して是れ直ちに原露文より移植せるものにして、原作の面目潑剌たるの譯書なる一事を特記せざる可からず。

□讀者の便を計り五卷に分冊══至廉の價を以て頒つ

══第二卷以下續々發刊すべし══

世界的大傑作復活は**尨然**たる**大卷**也、本書是を短幅の間に縮めて能く**其眞髓を盡くす**。原作の名に憧るゝ事久しき人は就て見よ。

脚本 復活

島村抱月氏脚色

▼總洋布最上製▼定價金七拾錢
▼挿畫三葉▼送料金八錢

——賣切又賣切——今回第六版出來せり——

『復活』は、十九世紀末の一大著作として世界を動かせるもの、靈肉相戰ひ、靈つひに肉に克つの終始を描ける傑作也。啻に一般讀書界に喧傳せらるゝのみならず、今尚屢〻劇に演ぜられ、肉に墮落せる婦人が人生最暗の境遇に陷りて、一道靈の曙光に蘇へるに至るの徑路は、觀者に至大の感銘を與へずんば已まず。我が文壇の權威者たる島村抱月氏、藝術座の公演脚本として之を脚色し、舞臺に上演せしむるや、女主人公カチューシヤの名忽ちにして都鄙に喧傳せらるゝに至る。戯曲としての價値は云ふ迄もなし、浩瀚なる原作を短幅の間に縮めて、よく其の眞髓を盡したる點は、まさに『復活』梗概として觀るべきものたり。

■トルストイ著作■

■人生論

相馬御風氏譯

▼袖珍特製美本▲定價貳拾五錢
▼紙數二百餘頁▼送料四錢

思想家として藝術家として最も偉大なる人トルストイの根本思想は、本篇に於いて遺憾なく窺ふことを得べし。世の所謂哲學書の乾燥無味なると遙に其の選を異にし、縱横の比喩を交へながら、極めて平明、趣味饒かなる筆を以て說き去り說き來る。まさに是れ人生最高の書にして、また最貴の書。而も何人も讀んでよく其の思想に徹すべし。是れ有らゆる方面の有らゆる人々の熱讀を求むる所以也。

■性慾論

相馬御風氏譯

▼袖珍特製美本▼定價貳拾五錢
▼紙數二百餘頁▼送料四錢

性慾は最も嚴肅にして又最も痛切なる事實也。曠世の大偉人トルストイ——一方には烈しき靈の渴望を有しながら、一方には强き肉の欲求に惱めるトルストイは、此の問題につきて奈何に感受し、はた奈何に解釋せるか。『人生論』と共に何人も數へらるゝところ多かる可きは實に此一篇たること、また言を須ゐざる也。

■トルストイ著作■

徳富蘆花氏序
昇曙夢氏序　播磨稔吉氏譯　イリヤ・トルストイ著

子の見たる父トルストイ

『わが懺悔』附錄、「廻轉期のトルストイ」を讀める人は、本書のいかにトルストイの眞面容を傳へしかを知らる可し。

▼總洋布最上製
▼紙數三百六十頁
▼定價八拾五錢
▼郵送料金八錢

■トルストイに關する著作■

文藝思想界の王者として世界の偉人たるトルストイは、その家庭にあつてどんな朝夕を過ごしたか、どんな態度で妻や子に接したか、著作をする時はどんな風であつたか、凡そ**ト翁の日常生活の狀態を掩はず飾らず** 赤裸々に叙したのは此の一卷で、翁の第三子イリア・トルストイ氏が露國新聞紙上に、「父翁回想記」として揭げたものである。人としてのトルストイを知るに於いて是れ以上のものゝ有り得る筈がなく、未だ知られざる多くの珍らしき事實は、應接に遑あらざる程頻々として讀者の目前に現はれてくる。一たび露國新聞に出づるや、世評籍甚、交際社會の話題は、これによつて賑はつたと云ふもの、まことに偶然に非ざるを覺える。

■トルストイ著作■

生田長江氏譯編　——世界大著物語叢書——

■梗概 アンナ・カレニナ

▼總洋布最上製
▼定價金五拾錢
▼送料金八錢

本書一卷の中心は姦通者と姦通せられたる者との心理の描寫にして、人間の不義に進む時の心的徑路、これを許さんとする人間の苦悶とは、驚くべき適確と精細とを以て描き出されたり。殊に讀んで、女主人公アンナが自ら罰すべく、轟然たる響と共に進み來る機關車に我が身を打碎く所に至らば、何人も面を伏せて懼然たらん。恐るべき人間の罪惡は如何にして、更に恐るべき人間の良心に罰せらるゝか、罪に對して神の攝理は如何に行はるゝか、這間の眞消息たゞ此書に見るべきのみ。

島村抱月氏譯編　——世界大著物語叢書——

■梗概 戰爭と平和

▲總洋布最上製
▲定價金五拾錢
▲送料金八錢

稀有の雄篇たる本書全部の讀破を難しとする人は、就いて本書を看る可く、又、別に發行せる同書の全譯に對する前、本梗概を一讀し置かば、了解極めて便なるべし。

■トルストイ著作■

阿部次郎氏全譯

光あるうち 光の中に歩め

▼總六號袖珍型
▼紙數二百頁
▼定價貳拾五錢
▼送料四錢

『光あるうち光の中に歩め』、聖書の中の一句を以て題せる斯の一篇の小說は、トルストイが、初代基督教に關する見解を最も平明に簡樸に、而して感情を以て美しく描き成せるものにして、又、彼が戀愛觀結婚觀を端的に知ることを得べく、夙に彼が作中の異彩と稱せらる。これを宗教の藝術化といはんか、將た又藝術の宗教化といはんか。一面宗教界の偉人にして一面文藝界の王者たる作者の面目は、最もよく此の篇に發揮せられたるなり。これを雄篇大作に充てる彼が集に見れば、洵に寥々たる一短篇に過ぎずと雖も、萬道の光、一點に凝つてこゝに赫灼たるの概あるもの、トルストイを讀む者にとつて最も便宜なるは蓋しこの一篇なる可し。

71
530

終